

中国語の苦手な台湾人——たった一つの、わたしのものではない日本語で語ってみる

報告 温又柔

リレー講義「世界文学に触れる」の授業内講演として、作家の温又柔さんに講演をお願いしました。

以下は、二〇一六年六月二三日（木）一〇一マルチメディアホールで行われた講演の内容を温さんご本人に書いていただいたものです。歯切れのよさ、ユーモア、魅力的な内容で温さんのライブトークは圧倒的な人気でした。

（沼野恭子）

今回、想像してみてもほしいことがあります。

もしもあなたが生まれた国や地域、あるいは時代がずれていたら、あなたにとっての日本語は外国語だったかもしれない。逆に、いま、外国語と思っている言語があなたの母国語だったかもしれない。

*

こんにちは、私はオンユウジュウです。（日本語）
 ニイハオ。ウオー・シン・おん、ジャオ・おんゆうじゅう。（中国語）
 リホウ。グア・エ・ミヤア・ギョー・おんゆうじゅう。（台湾語）
 レイホウ。ングオー・メン・キュウ・おんゆうじゅう。（広東語）
 アンニョンハセヨ。ネ・イルムン・おんゆうじゅう。（韓国語）
 ハロー。マイネーム・イズ・ゆうじゅう・おん。（英語）
 サルトトン。ミア・ノーモ・エスタス・おんゆうじゅう。（スペイン語）

残念ながら、ここからは日本語のみで進めます。東京外国語大学にいる皆さんの大半は、外国語——要するに日本語以外の言語——を専門的に学んでいる真つ最中だと思います。

そもそも、あらゆる言語は「外国語」なのだと思えます。というのも、どんな赤ん坊もことばのない世界からやってきて、ヒトのことばを習得します。母語候補となるそのコトバは、人間にとって最初に触れる「外国語」なのだと思えます。ちなみに私をはじめ触れたヒトのことばは……

「チレ・ワーワー、ピーフューミーミー、好可愛」
 （日本語訳…この赤ちゃんほつぷくぶく、可愛いねえ）
 こんなふうに台湾語混じりの中国語でした。やがてそこに新しいことば・日本語も仲間入りします。
 「還在睡覺！ キンキヤイ、もう、ワ・ンジーザイよ！」
 これは私の母がよく言っていたことばです。

まだ寝てるの（還在睡覺）と中国語でなじり、早く起きなさい（キンキヤイ）と台湾語でせかし、もう、を日本語で強調し、知らない（ワ・シーザイ）、と台湾語で念を押し、最後の語尾は、よ、と日本語で結ぶ……

こんなふうに、日本語のほかにも中国語や台湾語が私の生活空間には充満していました。「国語」としての日本語¹¹（ひらがな、カタカナ、漢字という文字たち）と出会うと私は、こうした文字で書き表せないことばを、雑音とみなすようになりま

す。「まだ寝てるの、早く起きなさい、もう知らないからね！」私の作文に登場する私の母親は、現実の母よりもずっと日本語が流ちょうです。

文字¹²日本語は、私を「限りなく日本人に近い台湾人¹³」にしていきました。

*

そんな自分は、日本人と台湾人のどちらでも「ない」？

子どものときから数えきれないほど言われてきました……

「日本語がおじょうずですね」⇕「なんでそんなに中国語が下手なの？」

私は、台湾人なのにふつうの台湾人のようには中国語ができません。

私は、日本語しかできないのにふつうの日本人とはみなされ

私は、ふつうではない？

私は、なんなんだ？

確かだったのは、私がこうしたことを日本語で考え、思い、感じているということ。

私は、自分が歩むべき道筋を示す手本を求めて、日本語を読み漁りました。

たとえば、在日韓国人二世の小説家・李良枝による小説「由熙」や「刻」、メキシコ系アメリカ人であるグロリア・アンサルドゥーアの詩「野生の舌を飼い馴らすには」、あるいはヴェトナムに生まれアメリカで活躍する映像作家トリン・T・ミンハの本たちを、夢中になって読みました。

境界線上で生きる彼女——なぜか私を熱狂させる表現者は女性が多い——たちが身をもって放つ言葉の輝きは、私を鼓舞しました。

「日本人でもなく、台湾人でもない」あるいは「日本人でもあり、台湾人でもある」。

その間を歩きつ戻りつする私自身のリアリティーを書くには、「ふつう」（とそれまで思い込まされてきた）日本語に、礼儀正しく従っている場合ではない。

私も、自分の「野生の舌」を取り戻さなければ！

そのためには、「国語」の枠におさまらない台湾語や中国語の音を駆使して表明してみせること。文字ではない、文字以前の音のようなものを聞くということ。「国語」としての日本語が崩れることを恐れず、むしろその破れ目から溢れ出た光をたどれば「コトバの生まれる場所」と出会えると信じること……。

*

私の「境遇」は、世界を見渡せば決して珍しくはありません。

親の母国とは異なる国で育つ子どもはたくさんいます。あるいは、政治的な状況などで前の世代が学校で教わっていたものとは別の言語を母国語として習うひとも。何らかの理由で、複数の言語をそれぞれ少しずつ自分自身のものであると感じながら生きていくひとたちも。

……まだ日本語になっていない、彼や彼女によるそんな小説や詩を夢想するのは、私のニホン語を偶然読んだ彼や彼女が「自分もこうだ！」と思うかもしれないと想像することぐらい、私にとって楽しいことなのです。

(本文は、講演のために用意したメモを修正・加筆したものです)